

アメリカ詩の研究

長 畑 明 利

本欄は2017年4月～2018年3月に発表されたアメリカ詩に関する研究の成果を紹介するものだが、今回は最初に、堀内正規『エマソン——自己から世界へ』（南雲堂、2017年10月）を取り上げたい。本書は必ずしもエマソンの詩作品を扱うものではないが、著者のエマソンの読解には、著者が考える〈詩〉の要素への関心が窺えることから、例外的に本欄で扱うことにした。実際、本書の「序」には「エマソンのテキストは固定したコンセプトに到達することをどこまでも先延ばししながら、コンセプト化（conceptualizing）をしていく〈詩〉なのである」という言明がある。また同じく「序」には、エマソンのテキストの抜粋を改行して配列し、『老子』の各セクションと並べた本（Richard Grossman, ed., *The Tao of Emerson*）も——本書で行おうとしていることとは全く異なるものだという断りはあるが——紹介されている。本書は4部構成を取る。第1部「自己信頼」から「経験」まではエッセイ「自己信頼」と「経験」に関する論考2編を収録する。「自己信頼」に関して著者は、「思弁そのものが効力を失う場所」に立つエマソンの態度を、ニーチェの「運命愛」（amor fati）の概念などに照らし合わせて考察し、「経験」に関しては、世界を分節化する知覚と世界の潜在性を生きる生命体としての人という二重性に着目し、エマソンが両者の中間地帯で「宙吊り」になっていると論じる。第2部「自己の開かれ」は2編の論考を収録。1編は「神学部講演」論で、著者は、エマソン自身も言語化できないような、身体内部に生じる感覚的経験の記述に注目し、その感覚によって人が世界との接触に開かれており、その経験が講演のテーマである「宗教性」の源泉を為すことを示す。もう1編は岩田慶治の「アニミズム」の観点に基づくエマソンの「自然」観の検討である。第3部「自己の条件」は3編の論考を収録。それらにおいて著者は、エマソンの説教に窺われる亡き妻エレンの存在を論じ、自己と他者との間の「距離」に注目しつつ、エッセイ「友情」を読み解き、「経験」ほかのテキストに見られる息子の死の影響を論じる。2編の論考を収める第4部「自己から世界へ」は、これまでの論考を踏まえて、「現代において、思想的にエマソンの「可能性の中心」がどこにあるか」について考察する。本書はエマソンのエッセイ、講演のみならず、日記や説教をも深く読み込んだ上で、従来のエマソン解釈に修正を迫る意欲的な研究書である。思弁の限界の先にあるものに注目したエッセイ・講演の読解はスリリングであり、また、妻と息子の死というエマソン個人の生に生じた出来事と彼の思想との関わりをめぐる考察も興味深い。詩の研究者にも読まれるべき本である。

回顧と展望

19世紀のアメリカ詩人に関しては、ディキンソンの研究が堅調である。当該期には、大西直樹『エミリー・ディキンソン——アメジストの記憶』（彩流社、2017年8月）が出た。本書は全5章からなり、それぞれの章で詩人の手紙や詩を引用し、また種々の関連資料を紹介しつつ、ディキンソンおよび彼女が生きた時代を描いている。第1章「ある詩人の一生」は、ディキンソンの生涯を家族の紹介も含めて素描する。続く第2章「孤独のなかで」は、ディキンソンが生きた時代と文化的背景を、彼女が住んだ町アマースト、当時の教育、信仰との関わりに焦点を当てて示す。第3章「戦争と恋」は、南北戦争を背景に、トーマス・ウェントワース・ヒギンソン、チャールズ・ウォズワース、ウィリアム・クラーク、オーティス・ロードなど、ディキンソンと直接・間接に接点を持った男性たちを紹介。第4章「「エミリー・ディキンソン」を創った人」は、ディキンソンの詩の出版の経緯を紐解くとともに、彼女の詩集を最初に世に出したメイベル・ルーミス・トッドの日本との接点なども紹介する。第5章「孤高の詩、その手強さ」は「謎かけのような詩」「キリスト教的世界観」などの視点から、ディキンソンの詩の特徴について論じる。「あとがき」によれば、本書は最新の研究を獵歩して、ディキンソンの詩と人生を著す手法はあえてとらず、「彼女の同時代あるいは彼女の生きた姿を直に知っている人々」の書物に注目しながら、「生身のエミリー」に少しでも近づこうとする努力の成果であるという。クラークやトッドら、ディキンソン周辺の人物についての詳しい記述はその姿勢を表すものに違いない。

20世紀のアメリカ詩に関する研究としては、当該期に、古賀哲男『ラングストン・ヒューズ——ブルースによる社会抗議』（大阪教育図書、2017年12月）が出た。帯によれば、本書は「本邦初となる本格的な研究書」である。実際、詩集や自伝などヒューズの作品は数多く翻訳され、また研究論文も数多く書かれているものの、管見の限り、単独の研究書は見あたらない。（ただし、Hans A. Ostrom, *A Langston Hughes Encyclopedia* の翻訳『ラングストン・ヒューズ事典』[木内徹訳、雄松堂出版]が2006年に出版されている。）本書は、自伝と一部の散文作品にも触れながら、ヒューズの主要な詩集を取り上げて、詩人としてのヒューズを紹介し、また、その詩が基本的にブルースに根ざしたものであること、そしてそれが社会抗議をもくろむものであることを明らかにすることを目指している。各章を紹介すると、序章に続く第1章は、『くたびれたブルース』と『晴れ着を質屋に』を取り上げ、ヒューズの詩の音声的性格の意味を彼のブルース詩の成立において確認する。第2章は1930年代の左翼経験を代弁する『あらたな歌』を中心に、20年代のハーレム・ルネサンス期の詩法からの変化を検証するとともに、詩による政治的プロパガンダについて考察する。第3章は『ハーレムのシェイクスピア』と散文作品『シンプル物語』を取り上げ、40年代の詩について検討する。第4章は『ジム・クロウの最後の立場』ほか40年代の他の代表的詩集を対象に、時代状況に抗う黒人大衆詩について考察。第5章は『遅らされた夢のモン

アメリカ詩の研究

タージュ』など1950年代以後の詩集を扱い、俗語とジャズを模したリズムの意味について論じる。第6章は、最後の詩集『豹と鞭』を中心に、大衆詩における「独創」の問題について考察。議論を総括する第7章を経て、終章は、ヒューズに先行する黒人詩人の作品を概観し、ヒューズの詩の意味について考える。本書はこのように、ヒューズの初期から晩年までの詩作品を取り上げ、その詩の分析を通じて、彼の詩の意味について考察するものである。本書の出版をきっかけに、ヒューズの詩についての議論が高まることを期待したい。

時代は前後するが、19世紀末から20世紀前半に、アメリカを拠点として美術評論など様々な分野で活躍し、また多くの芸術家と交流したサダキチ・ハートマンを扱う著書が出版されたことも紹介しておきたい。田野勲『演技する道化 サダキチ・ハートマン伝——東と西の精神誌』（ミネルヴァ書房、2018年1月）である。ハートマンは幕末に出島で生まれ、ドイツでの生活の後、14歳でアメリカへ渡り、戯曲や詩集を出版し、アメリカ美術、日本美術、短歌や俳句についての著作を残し、映画俳優としても活躍した興味深い人物だが、アメリカの詩人との接点もある。一つはホイットマンとの交流で、ハートマン自身の詩にも彼の影響が窺われる。もう一つはパウンドとの接点で、周知のように、彼の「詩篇80」で言及されている。歌人、俳人としての顔も持つハートマンは、20世紀初頭にモダニズムの詩人たちが関心を寄せたジャポニズムの文脈においても重要な人物である。本書は序章、終章を含め全12章からなり、ハートマンの作家、評論家、俳優としての活動を紹介し、主要著作について論じている。そのうち第2章でハートマンとホイットマンの交流が、第9章の一部でハートマンとモダニズムの接点が論じられる。写真家スティーグリッツとの関係やハリウッドでの活躍（1924年の『バグダッドの盗賊』に出演した）なども含め、アメリカ文学の研究者からもさらに注目を集めてよい人物である。

第二次大戦後のアメリカ詩人に関わる本としては、当該期に、山内功一郎『沈黙と沈黙のあいだ——ジェス、パーマーとペトリンの世界へ』（思潮社、2017年12月）が出た。本書はサンフランシスコにある画家のジェス（Jess Collins）の自宅探訪の記録、詩人マイケル・パーマー来日の記録、パリ在住の画家アーヴィング・ペトリン訪問の記録を軸に、それぞれの芸術家・詩人と彼らの作品について綴った本。ジェスのパートナーであった詩人ロバート・ダンカン（著者が訪れたサンフランシスコの家はダンカンの家でもあった）の詩やパーマーの詩の翻訳が、あるいは、ペトリンの作品に関連して語られるツェラーン、ジャベス、ゼーバルトラの作品についての解説や考察が随所に差し挟まれており、これらの詩人や画家の理解のために有益である。しかし、それにも増して本書は、作家や画家に直接会って時間をともにし、その中で彼ら、あるいは物故したパートナーの考えや生活ぶりを伝えてくれる。その内容は疑いなく彼らの作品をより深く理解することに繋がるであろう。誰もがこうした経験を得ること

回顧と展望

はできないことを思えば、貴重にして贅沢な本である。

論集収録の研究成果に移る。ソロー生誕 200 周年を記念して、日本ソロー学会が企画した英文論集 *Thoreau in the 21st Century: Perspectives from Japan* (Masaki Horiuchi, ed., 金星堂, 2017 年 10 月) には、Junko Kanazawa, “Dickinson, Thoreau, and John Brown: The Voice of the Voiceless” と Ayako Takahashi, “Anne Waldman and Thoreau’s Civil Disobedience” が収録されている。中央大学人文科学研究所編『モダンイズムを俯瞰する』(中央大学出版部, 2018 年 3 月) には、真鍋晶子「エズラ・パウンドの詩学——ふたつの大戦と地上の楽園」が収録されている。Bob Dylan のノーベル文学賞受賞を機に文学研究者が歌や歌手を取り上げる機会が増えているように感じられるが、神戸大学英米文学会編『教養主義の残照——*Kobe Miscellany* 終刊記念論集』(開文社出版, 2018 年 3 月) には、菱川英一「歌われる詩としての‘Love Minus Zero / No Limit’」が掲載されている。カナダ出身の歌手をアメリカ文化との関係のうちに考察する英文論集 *Canadian Music and American Culture: Get Away from Me* (Tristanne Connolly and Tomoyuki Iino, ed., Palgrave/Macmillan, 2017 年 7 月) には、Steve Clark, “‘Something’s Lost but Something’s Gained’: Joni Mitchell and Postcolonial Lyric”, Hidetoshi Tomiyama, “Neil Young: Some Complexities in His Songs” などの論考が収録されている。本書は e-book としても入手可能だが (<https://www.palgrave.com/gp/book/9783319500225>), 今後、電子書籍の形態での出版は増えていくかもしれない。また上記のソローについての英文論考同様、英語による研究成果発表の機会も増えていくことが予想される。Paula Rabinowitz が編集主幹を務めるオンラインによる文学事典 *Oxford Research Encyclopedia of Literature* (Oxford University Press, 2015-) には、日本とアメリカ文学に関する複数の項目が掲載されているが、アメリカ詩を主たる内容とするものとしては、Akitoshi Nagahata, “The Reception of Ezra Pound and T. S. Eliot in Prewar Japan”, Hidetoshi Tomiyama, “The Reception of Beat Writers in Japan” がある (<http://literature.oxfordre.com/>)。

詩集の翻訳には次のものがあつた。エミリー・ディキンソン『わたしは名前がない。あなたはだれ? エミリー・ディキンソン詩集』(内藤里永子訳, Kadokawa, 2017 年 7 月), ニール・ホール『ただの黒人であることの重み——ニール・ホール詩集』(大森一輝訳, 彩流社, 2017 年 9 月), ケネス・レクスロス『レクスロス詩集』(ジョン・ソルト, 田口哲也, 青木映子訳, 思潮社, 2017 年 10 月), トゥパック・アマル・シャクール『ゲッターに咲くバラ——2 パック詩集』(新訳版, 丸屋九兵衛訳編, パルコ, 2017 年 12 月), マーク・ストランド『ほとんど見えない』(森邦夫訳, 港の人, 2017 年 6 月), クレア・ロバーツ『ここが私たちの上陸地』(高岸冬詩訳, 思潮社, 2018 年 1 月)。

アメリカ詩の研究

学会誌掲載の論文としては、*The Journal of the American Literature Society of Japan*, No. 16 (日本アメリカ文学会, 2018年3月)に、アメリカ詩に関する論考3件が掲載された。Yumiko Koizumi, “The Poetics of Sympathy in Joel Barlow’s Epic: A Paradoxical Reading of *The Columbiad* (1807)” は、パーロウの叙事詩『コロンビアッド』の登場人物 Zamor に焦点を当てて、詩人の「共感の詩学」をアメリカ建国の父祖たちの政治と関連づけて論じるもの。Teppeï Kuruma, “Kiss of Our Agony Thou Gatherest’: Hart Crane’s ‘The Tunnel’ and Allegorizing the Radical Fragmentariness” は、クレインの『橋』の第7セクション「トンネル」を取り上げ、その断片性と『橋』の共同体および社会的絆の問題との関係を明らかにするもの。Shihoko Inoue, “What Am I to Make of These Contradictions?: Sylvia Plath’s Domestic Poems” は、第8回日本アメリカ文学会新人賞論文に選ばれた論文、“A Birthday Present”などの詩を題材に、プラスにとって、家事は詩の創作に対峙するものであったとする従来の見解を再検討し、むしろ彼女は両者の繋がりを模索し、その統合を追求していたことを明らかにするもの。『関東英文学研究』第10号(日本英文学会関東支部, 2018年1月)には、飯野友幸「“A Step Away”——Frank O’Haraの詩における personality」が掲載されている。「personality」を鍵語として、オハラの再評価と1950~60年代に生じたアメリカ詩の変化を再検証するもの。『Ezra Pound Review』第20号(日本エズラ・パウンド協会, 2018年3月)は、研究論文として、上野葉子「Ezra Pound と Marianne Moore の “phantasmagoria”——デカダンス的水中イメージとモダニズムの葛藤」、来馬哲平「“Thou Shalt Not Always Walk in the Sun”: Ezra Pound の「未熟な」主体」を、シンポジウム報告、『詩篇』訳・注などとともに掲載している。

ほかにも以下の論考があった。小林潤「繰り返される崩壊——“The Raven”とPoeの愛した女性たち」『成蹊人文研究』第26号(2018年3月)、David Ewick, “Strange Attractors: Ezra Pound and the Invention of Japan, II”『英米文学評論』第64巻(東京女子大学英米文学研究会, 2018年3月)、小倉悠輝「“An Ordinary Evening in New Haven”における「日常」の修辞学」『試論』第52集(「試論」英文学研究会, 2017年10月)、Kevin Keane, “The American Dystopia in Allen Ginsberg’s ‘Howl’”『言語文化学研究(英米言語文化編)』第13号(大阪府立大学人間社会システム科学研究科言語文化学専攻, 2018年3月)、堀内正規「[研究ノート] W. S. マーウィンの英訳蕪村について——ブライス、アフアナシエフ、吉増剛造とともに」『比較文学年誌』第54号(早稲田大学比較文学研究室, 2018年3月)、小林愛明・関根路代・山中章子・池上俊彦「[研究ノート] ルイーズ・グルック——略伝と作品の特徴、ならびに詩の翻訳(1)」『英語文化研究』Vol. 51(獨協大学大学院外国語学研究科)。(名古屋大学教授)